HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ

タイトル	コミュニケーション研究のヨーロッパ種とアメリカ種 上 : マートン知識社会学の研究
著者	 犬飼,裕一
引用	北海学園大学学園論集,133: A1-A18
発行日	2007-09-00

コミュニケーション研究のヨーロッパ種とアメリカ種 上

- マートン知識社会学の研究

すべての重要な事柄は、すでに以前に誰かがいっているが、その御当人 近することと、その正確な応用をつかむこととは全く別の事柄である。 はそれを発見したわけではない。」(ホワイトヘッド、ロバート・マート ンの引用から) |科学の歴史がわれわれに教えてくれる通り、一つの正しい理論に接

目

次

はじめに

マートン、常識から常識の矛盾を突く知性

犬 餇 裕

返しである。考えるほどに不思議な領域である。イギリスの著名な で、日本の「戦後」と呼ばれる一時代を代表する丸山眞男は、マン から別の人物が別様に貢献し、そしてまた途切れる。 の業績が点として存在するだけで、すぐに途切れ、また別のところ 登場しない。学説史を振り返ればわかるように、名を知られた人物 なのである。しかし、偉大な個人が大規模な業績を作り上げ、学界 いった近年の有名人にあっても決定的な役割を果たしている。他方 ラス・ルーマン、ミッシェル・フーコーやピエール・ブルデューと かった。知識社会学のアイディアは、ノルベルト・エリアスやニク 偉大な先行者がおり、カール・マンハイムにおいて一つの頂点を迎 領域である。マックス・ウェーバーやゲオルク・ジンメルといった の注目を浴び、たくさんの人々が盛んに論評するのだが、後継者が ハイムから決定的な影響を受けている。知識社会学は、 かりは多くても、自らそれを研究しようとする人材に恵まれてこな えるが、その後は文献が引用され、人物の名前が挙げられることば を秘めながらなぜか継続的に研究が行われないという不思議な研究 毎度その繰り 確かに重要

はじめに

3. 2. 1.

用語法と概念構成

ヨーロッパ種とアメリカ種

4.

専門家と大衆 ―― 仮説演繹法と経験帰納法

知識社会学、あるいは知識をめぐる社会学的研究は多くの可能性

いている。 思想史家・兼・知識社会学者のピーター・バークは、次のように書

が、 は、 トン ス・ウェーバーの思想を継承発展させたものであった。」(ピー あるいは少なくともめっきり著作が書かれなくなってしまう。 でに述べた三カ国 したか』、 いても、他の社会学の領域と比して、事実上途絶えてしまうか、 は、 九三〇年代から六〇年代にかけて、 知識の社会学的研究は、 王立協会などの科学機関に多くの関心を払ったものだった 本質的には、 が書いたピューリタニズムと科学の関係についての著作 アメリカの社会学者ロバート・マートンであった。 バーク 井山弘幸・城戸淳訳、 『知識の社会史 ピューリタニズムと資本主義に関するマック [フランスとアメリカとドイツ] いずれにお 始まりはめざましかったものの、 ――知と情報はいかにして商品化 新曜社二〇〇四年、 唯一目立った活躍をした 十七頁) マー す

いつきなのだが、これこそがまさに本稿の出発点なのである。いつきなのだが、これこそがまさに本稿の出発点なのである。は何らかのヒントが得られるのではないだろうか。非常に素朴な思問が深くなっていくこの問いについては、バークがあげている「唯問が深くなっていくこの問いについては、バークがあげている「唯問が深くなっていくこの問いについては、バークがあげている「唯問が深くなっていくこの問いについては、バークがあげている「唯にのとしてしか成立してこなかったのか? 考えれば考えるほど疑いつきなのだが、これこそがまさに本稿の出発点なのである。

入れていく必要がある。「コミュニケーション」とは、複数の主体のション」という概念をめぐってしばらく続けられてきた議論を取り私見では、知識社会学を今後再生させていくには、「コミュニケー

ある。体」ではなくて、また「情報」そのものでもなくて、「やりとり」で体」ではなくて、また「情報」そのものでもなくて、「やりとり」でるのか集団・組織であるのかはこの場合問わない。重要なのは「主あいだで行われる情報のやり取りを意味する。「主体」が、個人であ

代や である。 名論)。 毎日会話を交わしている隣人の意志以上に重要であると確信される する人間とは別の実在-代」や「資本主義」が、あたかも意思をもった人間であるかのよう り取って理解するための手段であると考えることができる ている。哲学の言葉で言えば、概念実在論、あるいは概念の実体化 めぐる理論は、 在として取り扱われてきたからである。「お国」や「階級」の意志は、 これらの概念は生きて活動している個々人以上の存在意義をもつ存 は、二十世紀にあっては珍しくない。現に無数の人命が消費され ちが最大限に活躍した時代であった。これらは、 は に理解されるわけである。 主体と考えることもできる(社会実在論)。 本主義」はそれ自身として意思をもち自らの利害のために行動する て社会科学理論全般の歴史が関係している。一言でいえば、 この種の議論が登場してくる背景には、 「祖国」あるいは「階級闘争」のために命をささげる個人や集団 「国家」や 「資本主義」という言葉 しかし、その一方で、「国家」や 誰もが知っている例を用いれば、「国家」や 「階級」 長年の習慣であった一種の擬人法を克服しようとし や「近代」や「資本主義」といった主人公た ――主体と見なされてきた。 まさに擬人法である。そして、二十世紀 (概念) は、 「階級」や 社会学理論だけではなく 「国家」や「階級」や 複雑な社会の一 日々を現実に生活 例えば、 「近代」 「階級」や 面を切 や 社会を · 近

と移行してしまっているのである。うになるのである。認識のための概念は、いつしか政治そのものへうになる。擬人法が実在の人物よりも強烈な存在感を発揮するよようになる。擬人法が実在の人物よりも強烈な存在感を発揮するよ

ち構えているだけだという洞察がこれである。 いに異なった価値観同士の中傷合戦や、終わりのない水掛け論が待 無意味であるというのも、二十世紀の知的成果の一つであった。 延々と論争したり、街頭で闘争したりしても、 れは自然な成り行きなのかもしれない。 識する。 を理解し、説明しようとする立場が力を持つようになってくる。 点から理解しようとするならば、擬人法とは別の手法で現在の社会 た概念が人々にいかに多くの犠牲を強いてきたのかということを意 そんな二十世紀を経験した後の社会学理論は、 史実をどのように解釈し、評価するにせよ、 政治的な立場をめぐって 学問的にはほとんど これらの実体化し 突き放した地 互

らば、 後どのような方向に進んでいくべきなのかについて、 が得られるのかもしれない。 とプロパガンダの二十世紀を経験した後に、社会学と社会理論が今 て考えるべきなのではないか。ここまで考えてくると、イデオロ 部でやり取りされている情報 となのではないか。その方が実り多いのではないか。 について、それらが成り立っている社会的諸条件を明らかにするこ むしろ、 実体化した概念についてあれこれ論評するよりも、 やるべきなのは特定の立場をめぐって互い (インフォメーション)の動態につい 何らかの知見 もしもそうな に争う諸勢力 社会の内

れてきたスローガンである。ただし、理論の世界にあっても「擬人「実在概念から関係概念へ」、すでにこれ自体が古くから繰り返さ

への展開は多くのことを物語っている。 は入れられ多くの人々が言及するようになるとすぐに擬人化が始まる。例えば、「システム」という概念をめぐる議論を観察すれば、多る。例えば、「システム」という概念をめぐる議論を観察すれば、多い説明は必要ないだろう。そして、「システム」を掲げる理論自体をの、の魅力は抗しがたく、関係概念を冒頭に掲げた理論でも広く受法」の魅力は抗しがたく、関係概念を冒頭に掲げた理論でも広く受法」の魅力は抗しがたく、関係概念を冒頭に掲げた理論でも広く受法」の魅力は抗しがたく、関係概念を冒頭に掲げた理論でも広く受法」のを対している。

にしたい。

「今後」を探る手がかりを獲得することとがしばしば断絶を経験し、しばしば個人的な業績としてのみ成立学がしばしば断絶を経験し、しばしば個人的な業績としてのみ成立学がしばしば断絶を経験し、しばしば個人的な業績としてのみ成立学がしばしば断絶を経験し、しばしば個人的な業績としてのみ成立学がしばしば断絶を経験し、しばしば個人的な業績としてのみ成立とのではがある。その過程で、独特の曲折を経てきた。本稿では知るのではがある。

1.マートン、常識から常識の矛盾を突く知性

「私は次の春学期にやらなければならない科学社会学の講義の準備を目下続けているところである。それらの中では、論文の中で主に行った観察についてさらに展開することになっている。そして、いままさにここで決めなければならないことは、巨人の肩の上に乗る小人のアフォリスムに、大きく手を入れるか、少しにするべきなのか、何もしないのか?ということである。また、当然、私は読者がこのアフォリズムの歴史にということである。また、当然、私は読者がこのアフォリズムの歴史にということである。また、当然、私は読者がこのアフォリズムの歴史にということである。また、当然、私は読者がこの中では、論文の中で主に行った。Merton, On the Shoulders of Giants)

識を並べているようにも見えるのだが、 うのに出会うことがある。あまりに説明に無理がないため、一見常 問題に光を当てて読者を驚かせるのを無常の喜びにしている人々も ている言葉と議論の枠組みを使いながら、 者を煙に巻くのを楽しみにしている人々がいる一方で、 な着想を打ち出すのに夢中で、次々と新しい言葉を作り出しては読 返しているわけでもないといった議論である。 ためて説明されると何度も膝を打ちたくなるような優れた説明とい 17 る。 至極当然で、 とりたてて驚くようなことは何もないのだが、 かといって誰もが毎度繰り 今まで見過ごされてきた 著者の中には、 誰でも知っ あら 新奇

原著で十七頁ほどの小文であるが、マートンが年来の知識社会学研 社会学とマスコミュニケーション Merton 1910-2003) になる。 究を論集に収めるに当たって書き下ろしており、 oziologie and Mass Communications Research)」である。これ 新版一九五七年、 大論文に匹敵するか、それ以上の内容を含んでいる。 実力であるといえよう。 本稿で取り上げるのは、 このあたりは、すでに「古典」の地位を確立している著作 しばしば通常の学説史的な理解を超える内容に出会うこと 増補版一九六八年、など) に収録された「序説 の論集『社会理論と社会構造』 ロバート・K・マートン (Introduction; 密度の濃い論述は (初版一九四九年) (Robert King 入念に読んで Wissenss-知識 は

概説書には、抽象的な社会学理論と経験的・実証的調査の橋渡しを上げたマートンは、まさに後者の代表者であるといえる。社会学のタルコット・パーソンズと並んでアメリカ社会学に一時代を築き

する 紹介される。 場合はやろうと思えば、 ている。パーソンズの り出して 取り入れた点で、パーソンズ派とは異なった独自の理論構成を行 在的機能の区別や、 であるといわなければならない。 として高度さの基準であるならば、 ジを割いて特異な用語体系の説明をする必要があるが、 的 度に比してマートンの仕事が「概説的」な魅力に乏しいのは、 たとの説明が追加されることもある。 い用語が次々と出てきて一般人には理解しがたいことが な用語の乏しさなのかもしれない。この点は、次々と新造語を繰 「中範囲の理論 (悪名) また、 高い「誇大理論」を建設したパーソンズと異な 機能主義社会理論の領域では、 機能 (theories of middle range) _ 「理論」を概説しようと思えば、 数行の説明で済んでしまうからである。 (正機能) と逆機能の区別といっ マートンはまことに素朴な著者 ただし、 貢献の大きさや 顕在的機能と潜 の提唱者とし マートンの 多数のペ た視覚 魅力 知名

呼ばれる著者たちを暗示する。 では、決して素朴でもなければ、見慣れた話の繰り返しというわれる。平明な文体に深い洞察を伴っている点で、マートンは同時代記んでいくと必ず鋭利な着想が潜んでおり、時として愕然とさせらいる会での社会学の著者たちよりも、はるか以前の道徳家(モラリスト)との社会学の著者たちよりも、はるか以前の道徳家(モラリスト)との社会学の著者たちを暗示する。

し、マートンが最初の著作として一九三八年に発表した博士論文のは、当てずっぽうの印象批評のように思われるかもしれない。しかこの種の推察は狭い社会学理論の領域だけで考えている場合に

Technology & Society in Seventeenth Century England)」であることを考えると、あながち根拠のないことではないことがわかってさる。科学史の研究に出発したマートンは科学社会学の創始者でもあり、十七・十八世紀のヨーロッパの著述家が書いた作品に通じてあり、十七・十八世紀のヨーロッパの著述家が書いた作品に通じている。時代は道徳家(モラリスト)の全盛期である。

of Giants)」(一九六五年)は、ニュートンの言葉から取られている。 の著者が書いた本だと信じていたくらいである。 縮であるが、私は、かなり以前マートンを読み始めた頃、『十七世紀 すでにこの種の著作が名声を獲得し版を重ねていること自体が、 なアフォリズム集のタイトル の道徳家(モラリスト)を連想させる原因である。 言い表す才能に恵まれている。このこともまたマートンに古くから 多くの言葉を費やして論じてきた理論を、この人は魅力的な短文で らは時に理論そのもの以上の魅力をもっている。より正確にいえば トンの著作の方々には、 マートンという社会学者の特異性を示している。 何度強調しても強調しすぎることはないほど重要である。また、マ 独自性であるということもできるだろう。一言でいえば、 イングランド』や また、 この点が同世代のアメリカの社会学者に対するマートン 『巨人の肩の上で』は、 魅力的な警句が散りばめられており、 「巨人の肩の上で(On the Shoulders 社会学者と同姓同名の別 私事にわたって恐 ちなみに、 マートンの それ 有名

例えば、有名な論文「イデオロギーとしての機能分析」(『社会理論同じことは、マートンの理論家としての代表作についてもいえる。

「機能分析」を掲げる多くの同国人にはない独自性が明らかであ と社会構造』 う。 りした機能的必要を充足するためにあらゆる現存の社会構造が けようとはしているが の辺境を超えてかの見知らない不毛の領土に踏み込むことを避 彼はまんまと一杯喰わされるであろう。また「何と美しく万物 神をたたえて飲もう』」と論証したフランクリンのような人に、 ると、すぐさまその子供を世話する母親がいる」といったミシ は自然の配剤がなされているのだろう。 りやすいであろう。 否かは別として——に陥るとすれば、 レのもっと真面目な言い草に彼も同じように耽ることであろ れたが故に、 議論に没頭するキリスト教神学者のように、神は「腕の関節を、 由ではないが)にであうであろう。 くれたのだといい出したソクラテスの運命(もっとも同 食物のにおいを嗅ぐのにちょうど都合よく鼻の下に口をつけて あったように、それは馬鹿げた論議 (reductio absurdum) にな されても当然である。 摘したよりももっときびしく告訴されるであろうし、 口に盃を当てるのに過不足なくちょうどよい長さにつくってく 「実際、社会学における機能分析が目的論 『さらば盃を手にして、この恵み深い叡智をほめたたえよ。 目的論と相接する他の思想体系と同様に に収録)にある次の一文を読むならば、 われわれが酒を飲むことを神は明らかに欲して 機能分析者は、 人間思想史上の目的論でしばしばそうで 社会学における機能分析も、 また、 その場合、 それは、 子供がこの世に生まれ 神の設計にもとづく 神はわれわ ただちに先に指 保守的である 「機能主義」 もっとも、 また告訴 一の理 n ح

陥ってしまうおそれがある。」(三十三頁、訳語一部変更)不可欠であるという公準を一たび採用すると、馬鹿げた論議に

り立ちうるのならば、 理の罠を面白がっているのは間違いない。 ŋ り立たせる。もちろん、この種の議論も、 たちと同じく陥っている「馬鹿げた議論」を、単なる教訓としてよ 様式の目的論が社会学の議論として不毛であるといったことであ といった書き方である。 のに映るだろう。社会学理論というよりは、 トンはここに登場するフランクリンと同じ視点で、 も、 パーソンズのイメージが頭に焼きついた研究者の眼には異様なも ただし、非常な博識に加えて、古今の著述家たちが今日の著者 むしろそれ自体として楽しんでいるのが明らかである。 酒が飲みたいという結論もやはり目的論を成 論旨としては、 まず結論ありき、といった モラリズムの得意領域で 神の設計が目的として成 啓蒙主義時代の名文家 目的論が陥る論

得がたい知的世界を造り出しているとも考えることができる。と学者の内部に独特の緊張状態をもたらしていると考えることもでりカ社会学が得意とする同時代を対象とした(非歴史的)経験的・ロッパ社会学得意の「歴史」をめぐる探求が行われ、他方ではアメロッパ社会学得意の「歴史」をめぐる探求が行われ、他方ではアメロッパ社会学のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のようなマートンの研究・著述スタイルは、私見では、この社のようなマートンの研究・著述スタイルは、私見では、この社のようなマートンの研究・著述スタイルは、私見では、この社

して以来の最重要の課題が集約されているともいえる。問題は知識多少大げさな物言いになるが、ここには社会学という学問が成立

に感嘆している様子であると理解していただくこともできる。 でもある。さらには、私事にわたる余計なことを付け加えていうなでもある。さらには、私事にわたる余計なことを付け加えていうないが、本稿は、これまで「ヨーロッパ社会学」の思考に首まで漬かっらば、本稿は、これまで「ヨーロッパ社会学」の思考に首まで漬かったが、本稿は、これまで「ヨーロッパ社会学」の思考に首まで漬かったが、本稿は、これまで「ヨーロッパ社会学」の思考に首まで漬かったが、本稿は、これまで「ヨーロッパ社会学」の思考に首まで漬かったが、本稿は、これまで、「アメリカ社会学」の思考に首は、本稿は、「本稿」の思考には、本稿は、「本稿」の思考には、本稿は、「本稿」の思考には、本稿は、「本稿」の思考していただくこともできる。

2. ヨーロッパ種とアメリカ種

るのか分かっていないが、その内容は大したものである」(マートン)大した内容のものではないし、ヨーロッパの学者は自分が何を話してい「アメリカの学者は自分が何を話しているのか分かっているが、それは

質上数字の扱いやコンピュータの利用にも長けている。 たフィールドに腰を落ち着けて社会調査に精を出す。 ては新奇な用語を用いて論文や著作を書いていく。 主に英語その他のヨーロッパ語で刊行される理論書を次々と消化 である。 証」と呼ばれる領域の間に生じている誰の目にも明らかな分裂状態 人々は勤勉な実務家であり、世界中の同業者と同じく、ここと定 も目にする一つの事態がある。それは「理論」と呼ばれる領域と「実 社会学という学問領域としばらくの間付き合っていると、 とりわけ日本の学界では 理論」 の人々は語学が得意で、 他方、 また仕事の性 77 やで

多くの場合哲学の領域の動きに結びついており、芸術や文学の領域両者の間の架橋はかなり困難である。「理論」の人々が好む議論は、

域は、 文科学と自然科学とではそもそも関心のあり方が異なっているのだ だと信じている。 捨てることができないからである。 の中間に置かれた社会科学全般の宿命であるともいえるだろう。 が実現しているような知識の確実性を社会学においても実現すべき 自分たちこそが のアイディアとも対話可能である。これに対して、「実証 社会科学はこれら二つのどちらかに完全に特化し、 人文科学と自然科学の闘技場といった様相を呈してきた。 「科学」 両者の相違は、 としての社会学の担い手であり、 広い意味では人文科学と自然科学 とりわけ社会学のような新興領 他方を切り 自然科学 」の人々は

それは、 手していく様子が想像できないだろうか 揚げした「科学社会学」の創始者として野心満々の事業に次々と着 宣言するものであるという読み方もできるだろう。一九三〇年代に する人物であることは間違いない。こうして考えてみると、 な輸入地だったアメリカが次第に自立し、 界大戦が大きな影響を与えており、 関係である。 大学院で科学史を勉強していた人物が、一九四〇年代には新しく旗 ○年代に書かれたこの論文は、 いく過程が観察できる。もちろん、マートン自身がこの過程を代表 は今日の社会学研究最大の根拠地である。 ただし、もう一つの対立軸が存在することも忘れてはならな 3 ヨーロッパは社会学の成立地であり、対するアメリカ ロッパ系の社会学とアメリカ系の社会学の根深い対立 アメリカ社会学の独立と覇権確立を ヨーロッパ産の社会学の一方的 一大発信地へと昇格して 両者の関係には二度の世 一九四

ンとの相互関係 (interplay between social structure and communi-マートンが取り上げるのは、当人が「社会構造とコミュニケーショ

について次のように書いている。 ミュニケーション」を扱う社会学研究が二系統に分かれている様子cations) を取り扱う研究」と呼ぶものである。マートンは同じく「コ

焦点はそれぞれ違っている。」(四〇〇頁) 域はもっぱら観念と社会構造の相互関係を取り扱うが、 メリカ種」と呼んでよかろう。これら二つの特殊な社会学の領 を 5 他方は今日までアメリカでいちばん普及したものである。 対照的な二類型〕 はヨーロッパの所産で、そこでたゆみなく発達したものであり、 次のレッテルを文字通りに解してはならないが、 ·研究を属とすれば、 「ヨーロッパ種」、マス・コミュニケーションの社会学を「ア 実際社会構造とコミュニケーションとの相互関係を取り はその二つの種と見なすことができる。 両者 〔承前:コミュニケーション研究の 知識社会学 関心 一方 扱

いうのがマートンの理解なのであろう。ロッパ種」の派生ではなく、種の世代として同世代に属するのだとまれた二つの「種」であることを強調する。「アメリカ種」は「ヨーは、「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」が同一の先祖から進化して生生物の学名を属名と種小名の二語のラテン語で表すリンネの二名法

チンパンジーを並べて、「生物」という概念でくくり、バナナとチンというのは必らずしも正当なやり方ではないからである。バナナとているはずの二者を架橋する概念をむりやり作り、それを前提としをおびき寄せようとするものである。理由は簡単である。元来異なっただし、この種の議論の立て方自体が、すでに名手の術策に読者

理があるからである。 れないだろう。 パンジー 食べる様子を観察していたほうが有意義であろう。 ―― でくくって何らかの意義ある議論を構成すること自体に無 の相違点をいろいろ挙げて論評してもたいした成果は得ら そもそも、 むしろ、チンパンジーがバナナを美味そうに 同 一のカテゴリー、 あるい は概念 上生

くてはならないのである。 違いや類似点)。 な論点が出てこなくてはならない してのチンパンジーとゴリラ)、しかも比較によって何らかの有意義 があるとするならば、 一の問題に取り組むことで何らかの有意義な議論が展開できな ・トンのいう「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」 言い換えれば、 両者が同 「ヨーロッパ種」 一の種類の概念であり(「類人猿」と (チンパンジーとゴリラの生態の と「アメリカ種」 の比較に意義

義をもっている。』という旗印を高く掲げた人達であった」(四〇〇 く顧慮せずに、 していてもいいのだと考える。大体、 主義的な結論を超克する可能性が差当りあるかどうかを、 大な理論を好む人々のやる仕事であって、 うことが真実かどうかは分からないが、少くともそれは重要な意 マートンによると、「〔ヨーロッパの〕知識社会学はたいてい規模壮 ただ問題が広く重要でさえあれば、 知識社会学者は、『われ 彼らは精巧な思弁や印象 専ら理論に没頭 時には全 われの

41 0 る [アメリカの] 社会学者や心理学者は、 これに対して、 陣営に多く見られ、その旗印には幾分違ったモットーが書かれて すなわち、『われわれのいうことに特に意義があるかどうかは 「世論とマス・コミュニケーションの研究をやって それと反対の経験主義者

> 題に関係のあるデータ、 だちに科学的に適切な事実観察を蒐集したことになる、 に誤解されていた」 これらのデータが理論的問題に対して意義があるかどうかについ るデータを蒐集することに重点がおかれていた。しかし最近までは、 は殆ど関心がもたれず、 からないが、 少くともそれは真実である』と。 (四〇〇一四〇一頁)とのことである。 換言すれば実質的に証拠としての価 ただ実際的な情報を蒐集しさえすれば、 ここでは一 というよう 般 的

者で、 事実を集めて議論を組み立てるのに対し、 えば、 演繹法を信奉し、 科学論や科学哲学の用語で言い換えるならば、 は、 行き着くと考えてい 経験的で確実な事実を集めていけば、 学的な洞察から出発して、 (意義) を事実 知識社会学は規模壮大な理論を好み、 意義 ともかく事実を収集する。 方法がまるっきり異なっているのである。 (意味) よりも真実(事実)を優先するというわけである。 (真実) に優先させ、 アメリカ種は経験帰納法を信頼する。 「仮説」を立て、 ヨーロッパ系知識社会学は、 対するアメリカ系マスコミ研究 いつかは重要な科学的発見に マスコミ研究者は経験主義 アメリカ種はともかくも おのれの理論に好都合な ヨーロッ ヨーロッパ種は 種は仮説

た文章であるが、 持されているともいえないだろうか。 は相当なものであり、 バナナとチンパンジーの比喩は唐突であるとしても、 っていない。 現に六十年以上を経た今日でも両者の 違いすぎるがゆえに互いに無干渉 これは一九四〇年代に書か 両者の相違 の平和が 距 は 維 縮

壮大な理論構築と経験主義の対立。 この対立は知識社会学やマス わ

「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」を、何とかして統合しようと努力 していることである。 るのは、 0 () 問として相互に干渉しないようにして共存しているといった方がよ なり異なっている。異なっているだけではなくて、 定しても、 底からの相違につながっているからである。 コミ研究という二領域だけにとどまらず、学問に対する考え方の ところが、マートンの議論を注意深く観察していくと驚かされ 通常の場合は相互不干渉の住み分けのようになっている 「ヨーロッパ系」の社会学と「アメリカ系」のそれとは 議論を社会学だけに限 互いに別物の学 か 根

でした社会的 でコトンがいうように、両者の違いはそれぞれが発展した社会的 で記合せを目指して、これらの関連しあった社会学的研究領域の統 で組合せを目指して、これらの関連しあった社会学的研究領域の統 で記合せを目指して、これらの関係という、それ自体が高度に知識 な組合せを目指して、これらの関連しあった社会学的研究領域の統 で記合せを目指して、これらの関連しあった社会学的研究領域の統 で記合せを目指して、これらの関連しあった社会学的研究領域の統 で記合せを目指して、これらの関連しあった社会学的研究領域の統 で記合せを目指して、これらの関連しあった社会学的研究領域の統 で記合せを目指して、これらの関連しあった社会学的研究領域の統 で記合せを目指して、これらの関連しあった社会学的研究領域の統 で記合せを記述した社会的

の努力が成功しているのかどうかは後ほど論じることにするが、両どうしても〝後知恵〞を得た者の優越感が入り込んでしまう。当人十年後の読者が、とりあえず「野心的な試み」と評価する場合には、六れは今日の視点から見てもかなり野心的な試みである。ただし、六ミ研究の領域を横断した独自の研究領域を打ちたてようとする。こマートンはここにヨーロッパ系の知識社会学とアメリカのマスコ

るような優れた説明〟とはこのことである。は何もないのだが、あらためて説明されると何度も膝を打ちたくない。本稿の冒頭に書いた、『至極当然で、とりたてて驚くようなこと者はこれまで殆んど知らなかったことをここに正直に記しておきた者の相違についてマートンほど明瞭に説明してくれている例を、筆

3. 用語法と概念構成

三原弟平訳)
三原弟平訳)
三原弟平訳)
三原弟平訳)
三原弟平訳)
三原弟平訳)
三原弟をもち始めている。それは知識社会学がもっている一種無害な懐疑の外をもち始めている。それは知識社会学がもっている一種無害な懐疑の外をもち始めている。それは知識社会学がもっている一種無害な懐疑の外

えれば、 る。 に、 質問や、「科学的に検証可能な定義として提示してくれ」という要求 ている」(四〇一頁)。ここでもマートンの面目躍如である。 が極めてルーズに解釈され、 研究対象の曖昧さである。「ヨーロッパ種」にあっては「知識や思考 て最も鋭利な指摘は、「ヨーロッパ種」の知識社会学研究にみられる 知識社会学のいう肝心の ここで主に言及されているのは、 マー ヨーロッパ系の知識社会学者は容易に答えられないのである。 ある時期には知識社会学の代名詞のように扱われていたマンハ トンの「知識社会学とマスコミュニケーション ヨーロッパの「知識社会学」の弱点がここにある。 "知識" とは一体全体何なのだ?」 という 殆んどあらゆる観念や信念が包括され カール・マンハイムの仕事であ 序説」にあっ つまり、

を含めてそのまま読んでいくことにする。切れ味を見せている部分なので、少し長くなるがマンハイムの引用論は戸惑いの対象となる。以下は、まさにマートンの議論が最大のアメリカの経験主義の風土に育った人間にとって、マンハイムの議イムの名前は、マートンにとっても偉大な先行者である。ただし、

Ļ 研究に解消されてしまう傾向がある」 求に一致した変化が生じ、かつては形式的図式であり、 に見られる変化と全く平行して、科学的見方の方にも政治的要 末事の関心のために吸収されてしまう傾きがある。 を捨てれば捨てるほど、その社会変革の力は具体的な個々の瑣 初めもっていたユートピア的衝動を、 極的に提携して、 は重要だと考えるだけでなく、それは真実でもあると考える。 観念をもって行為に先行すると考えている」という事実を、 するにいたった」という。 ごときは「中世後期における下層階級」の精神状態を要約して、 全体的な見解にすぎなかったものが、 の仮定からなる―― また彼はつぎのような有益な仮説 かも表面上は徹底的な観察の問題であるかのように彼はいう。 「彼らはほんの少しずつ自分らのもつ社会的政治的意義を自覚 ようとしても、 「右のような事実の例証は余りにも多すぎて、二三のものを求 かも、 以上のことは定義の問題であるにもかかわらず、 困惑を感ずる位である。例えば、マンハイムの 議会で連合すればするほど、 を提起する。すなわち「……支配政党が積 或いはまた、「すべての進歩的集団は、 と。 特殊なばらばらの問題の 同時にまたその広い視野 事実についてのいくつか こういういい またその政党が 政治の領域 抽象的 方は示 あた 彼

> うにみえる。 あるのに、読者はそのことを考えてみようとしない。 ことだが、こういういい方は多くの細かい経験を掴んでいるよ のみならず、 から、ひとはそれを仮説ではなく、むしろ事実だと考えたがる。 唆的であり、 すぐに一般化された事実として不当な地位を得るのである。 なされるためには、 て気づいたに違いない多くの事柄に多大の光明を与えるところ 治的社会のなかで生活するうちに経験し、おそらくは折にふ したがって、これが興味ある仮説以上のものと見 ヨーロッパ種の社会学的方式にしばしば見られる 明白で殆んど疑いをいれない 先ず非常に苦労の多い経験的調査が必要で また知識人が それは 政

(四〇三一四〇四頁)

際 パの社会学者は るということになる。しかし、パーソンズの側からすれば、 る。「ヨーロッパ種」に属する批判者からすれば、決定的な欠陥であ 17 ζJ きながら、 判としてこれ以上に説得力のある文章は稀だろう。マンハイムを引 口 このことは、 る。 工 ッパの知識社会学、 まさにマートンの真骨頂である。 ド ーバーやデュルケムのようなヨーロッパの社会学者を論じる しばしば指摘されてきたように、パーソンズがマックス・ イツやフランスの歴史や哲学史的な問題は意図的に無視され マートンは実に的確に 例えばパーソンズの議論などと比較すると際立って 「科学」として論じるべき問題を、 さらにはヨーロッパの理論社会学全般 「ヨーロッパ種」 アメリカの社会学者によるヨ 歴史や文学の知 の弱点を突い ヨーロ の ッ 7 批]

識

や哲学史の薀蓄で代用していると反論することになる。

つまり、

る。 うからである。 だから、 0) る人々がおり、 ないというわけである。 重要性を強調したい人々がいる。 一方には、 の素材であって、ドイツ哲学の薀蓄やフランス革命の史実では ソンズがマックス・ウェー 批判は互いの関心や価値観に対する判断に行き着いてしま ともあれ自分なりの 他方には、 この種の議論は、 各国の歴史や古代以来の哲学史的 バーやデュルケムから受取るのは「 両者の関心がそもそも異なるの 「科学」や「理論」を最優先す いうならば水掛け論であ にな問題 理

肉である。

用いて、 ど絶望的に困難である。ところが、 ないというのである。 の著者は、 強調したがる 著者は英語の science と、 的には魅力的な言葉であるが、 や「進歩的集団」や「ユートピア的衝動」や「社会変革の力」といっ 点からいえば、マンハイムは、 ことで、 ることは困難である。 たとえば 命題として提示しているのか? た言葉を毎度頻繁に用いるが、これらを厳格に定義し、 これに対して、マー 容易には反論不可能な論点を捕まえている。 少なくともマートンがいう意味で「科学的な」――英語圏の 「ユートピア的衝動」 そんなことが必要であるということすら考えようともし 検証に耐えうる命題を構成するとなると、 また、これらの言葉 ートンは ドイツ語の Wissenschaft との違いをしばしば _ ∃ 「下層階級」や「社会的政治的意義 魅力的であるがゆえに厳密に定義す のような用語は確かに哲学的、 と疑うわけである。もっといえば、 1 マンハイムのようなヨー ロッパ種」 - 概念ではない の心臓部に切り込む 突き放した視 検証可能な ほとん ロッパ 文学 を

これは鋭い指摘であるといわざるをえない。この種の議論では、

実証系の学者が同じ部会で報告するとき、実証家がよく口にする皮中戦のような議論」である。これは社会学の学会で理論系の学者と的な思弁を語っていることは間違いないが、それを現実の社会生活的な問題される。文体からして魅力的で、深い思想や高度に抽象難しい用語同士がぶつかり合い、過去の学説の説明や人文科学系の

つまり、 移動する。 仮にこの種の宣言をしたとすると、 線からの反論は、 できるのは、 の種の宣言は決して気楽にできるものではない。 であると明言するならば、 についての見解を自分は受け入れていないと宣言することである。 もちろん、マンハイムの側からの反論は可能である。 マートンが自明視しているような「経験的調査」など不要 ただし、ここから先も再び水掛け論が始まる。 社会学というよりも社会哲学を標榜する人物である。 マートンが自明のこととして振りかざす「科学」 この種の批判は効力を失う。 議論は自動的に科学論の次元に かなり気楽に宣言 しかし、 最も妥当な

数値化といった手法が なってしまう。 突き詰めれば科学ではなくて哲学や文学の仲間であると断言したく 会を「調査」 的思弁によって論難しようとする。生きた人間が生活する複雑な社 ことになる。「ヨーロッパ種」---の教理を共有する秘教集団内部でしか通用しない言説なのだとい 「アメリカ種」 は不当に単純化するものであり、 そんなものはしょせん個人的な見解であるか、 あるいは実証家は、 「科学」 を占領する事態そのものを深い あるいは理論家は、 マンハイムのような議論 「数値化」はその行為 経験的調査や 特定 哲学 は

立場である。これらは両方とも決して見覚えのない議論ではないし せている基本条件・ それは自己目的的な単独の を提示することであって、命題を検証することではないからである。 もそも「ヨーロッパ種」にとって重要なのは、 知られた用語を使えばこの種の議論はいくらでも続きが書ける。 る。 むしろ見飽きて陳腐になっているくらいである。 自体が人間と社会の物象化に手を貸すことであるといった議論であ マルクス主義と現象学 --- いうならばメタ科学 --- に対して興味を抱 「科学」よりも、 両方ともヨーロッパ由 種々の科学を成り立た 考えるに値する命題 のよく

で堅実に勤務にいそしむ「アメリカ種」にはどうでもよいことばか めぐる討論によって問題を解決することが不可能な次元にはまり込 にとっては無意味である。 意であるが、 種の哲学的な次元での議論は らない最大の過ちでもあった。 立ち入って反対者を論難することは、 んでしまうのである。そもそも、 に行き着いてしまうからである。 口 主義にとっては原理的に存在しないことだからである。 、だからである。 ッパとアメリカの知的覇権争いが根本的な原理をめぐる水掛け論 こうして本稿の議論はやはり同じ地点に戻ってしまった。 この種の議論でどれだけ非難されても「アメリカ種」 空中戦がいくら派手に戦われても、 「ヨーロッパ種」 経験的に検証できないことは、 経験的に検証不可能な次元にまで つまり、 経験主義にとって犯してはな 議論は検証可能な事実を にとって得意中の得 逆に、 この 地上 経験 3 |

4.専門家と大衆 ―― 仮説演繹法と経験帰納法

「十九世紀の後半には、近代人の世界観全体が、もっぱら実証科学に「十九世紀の後半には、近代人の世界観全体が、もっぱら実証科学に

う問題である。

・さい、なぜ両者の相違が生じてきたのか? とい相違や対立点について論じてきた。ただし、意図的に落としてきた稿では、すでに理論系と実証系、ヨーロッパ系とアメリカ系の間の名。本ヨーロッパ種とアメリカ種の相違は研究対象の相違でもある。本

幹であり、これこそが科学論の領域で「経験帰納法」 付き合って、 者が日ごろ研究活動をつづけ、 験帰納主義」と呼ばれてきたものである。 な知見が得られる 究方法も対象に適するように改良を加えられていく。 問の性質を規定するのは研究対象の性質でなければならない。 のが経験主義の根本である。長年やっていれば、 マートン自身の知的背景にある経験主義の原理に従うならば、 石の上にも三年、 (帰納法) に違いない、 さまざまな知見が開けていくという 研究対象を深く知る中で、 というのが経験主義の根 そこから何か大切 あるい 特定の対象に 研究と は 研究 学

.結び付けて説明される。これに対立するのが、大陸合理主義の伝哲学史の通常の説明では、経験帰納法はイギリス経験主義の伝統

する。 3 | 当初の仮説が生き残っていくのだという考え方である。 実の諸勢力の妥協の原理である「民主主義」が成立したのもイギリ 説であり、そこから引き出された命題が、種々の検証を経ることで、 スであったというのが、 の下で発展してきた仮説演繹法の流れである。 対するイギリスでは厳密な実験科学や、種々の実用工学が発達 ロッパには、次々と大規模で精緻な「哲学」や「思想」 社会問題については、 毎度おなじみの思想史の話である。 ヨーロッパ系の専制主義を尻目に、 学問の出発点は仮 現に、 が登場 現

に対し、 を統括する専門家、 会学にあって、 ることである。 対面しなければならない。他方、仮説演繹法は書斎の知識人や業務 面もある。 およそ教科書的な説明は以上のようなものだが、 に関心を抱く。 仮説演繹法が仮説を生み出す特定の少数者に関心を集中す それは経験帰納法が現場 経験帰納法は「現場」に生活する多くの人々に直接 言い換えれば、「社会」を論じることを責務とする社 、あるい は権力者の思考の総体 (フィー ルド) 漠然とした「知 を重視するの 両者には別の

 \exists

この学問領域の核心をなすものは、 殆んどあらゆる観念や信念が包括されている。 章で示唆するように、 主な焦点となっている。 をひたすら研究する。 がその環境をなす社会構造によってどんなふうに影響されるか とも確認されるような知識が、どんな社会的脈絡から生じたか Ξ ーロッパ 種は、 知識の社会的根源を掘りだし、 知識や思考が極めてルーズに解釈され ここでは、 この学問領域では、 社会による知的視界の形成が 系統的な証拠によって多少 第十二章や第十三 それにしても、 知識や思考

> experts) 学であれ、 学がいちばん直接的な関心をもっているのは、科学であれ、 est in the social contexts of that knowledge which is more or ということに対する社会学的関心である(a sociological interless certified らの専門家の知的所産 なのである。」 また経済思想であれ、 by systematic evidence)° (四〇一頁 (the intellectual products 政治思想であれ、 すなわち、 とにかくそ 知識社会 of 哲

れ

う。 る。 産 かになる。 会学」として理解してきたものの本来的な性格についてかなり明ら 考えるならば、今までヨーロッパ系の知識 ものである。 払拭されたことを、マートンに本当に感謝したい。まさに学恩その した地点から最も的確に説明していると評価することもできるだろ であるにちがいない。 ヨーロッパの知識社会学(Wissenssoziologie)は「専門家の知的 実はこの一文に出会ったことが、本稿を準備するきっ ーロッパ系の社会学に取り組んできた人々には、相当に意味深長 また、 とりわけ、これはマンハイムの に集中するというのは、 弱点についてはなおさらである。 永年の疑問 確かにヨーロッパ種とアメリカ種の関心の相違として 具体例は、 あるいは漠然とした不安感 まさにその通りである。この一文は ほとんど無限に思いつくはずであ 「知識社会学」について突き放 (情報) だけで かけであっ が 「知識 一気に た

とは別の道を行く。 これに対し、「アメリカ種」はヨーロッパ系の社会学、 知識社会学

の水準と呼ぶところに、アメリカ的特徴の意義があるのだが 「アメリカ種には、 般の知的状態(これをインフォメー お

実を明らかにする科学 この 注目してきた人々にとって、「大衆的 (popular)」であることは、 んできた本稿の筆者にとっては新鮮な展開なのである。 ば、 まま わんとすることをさらに展開するならば、 願 新しいことのない常識なのかもしれない。まさに読者のご教示を まう。 トではなくて、 V 種 るが、 衆の信念を社会学的に研究すること(the sociological study of 社会学のヨーロッパ種とアメリカ種が、それぞれ独自の焦点を L るように、 なものでもない。 いっても、 popular belief) (opinion) 「アメリカ種」にとって、 なけ の議論は「アメリカ種」 っていることのうちに現われている。」 れた部分に外ならない。 境界線は任意のものではないが、例えば国境線のように明確 たいところである。 しかし境界線上にあるものを除けば、 れば これとても、 一見知識と見られるものも、 に焦点をおいている。 ならないのであって、それはコミュニケーションの 白黒というようなはっきりした区別ではない。 (social)」であることの同義語なのである。 「社会」が日々産出される現場 意見は微妙に移行していつのまにか知識とな にある。 意見のうちで特定の証明基準によって確認 Wissenschaft ではなくて science ただし、「ヨーロッパ種」に専ら取り組 このように意見が発達して知識とな 社会学 (sociology) とは大衆的な事 に長年取り組んできた人々には何 それは知識よりも、 もちろん、 単なる意見に堕してし (四〇一一四〇二頁) 部の限られた知的 やはり両者は区別 知識といい意見と (フィー むしろ特に意見 マー ルド) 約言す トンの 両者 7 に な 工

> 「 ヨ | つつある。 けマ か言いようがないからである。 を走る「他人志向型」 の「自由からの逃走」 全にとらえることはできないのではないか? という実感が広 る知的所産であるが、 れ自体として見事な成果であり、 込められてしまう。 種の無責任を続けていると、 権威主義的人格」(アドル 1 私見では、 -バル) スコミ研究に対して自分なりの立場表明を行わないことは ロッパ種」に従事する人々にあっても無責任である。 ヨーロッパ人が「大衆の反逆」(オルテガ)と呼ぼうと、 趨勢にある現代社会で「アメリカ種」 (V わゆる「グローバ 昔のヨ (フロム)を指摘しようと、 今日われわれが生活する「社会」の本質を完 (リースマン)の研究は所与の事実であるとし] かび臭い「学説史」の薀蓄世界に閉じ ロッパ人が生み出した「社会学」 ホルクハイマー) ハル化」 確かにそれだけを探求するに値す (=アメリカ化)の地 アメリカ人が先頭 と呼ぼうと、 の社会学、 またこの 球 とりわ 的 はそ グ

況は、 することである。 が考えもしなかった領域から次の時代の を超えて日々新たな現実を生み出しているのである。 に住んでいる。そして、 に生活する住民は、 が注目する文化へと変質していくことすらある。 「豊かな社会」(ガルブレイズ)や 「大衆文化 しかも、 (popular culture)」を観察する上でしば 限られた知的エリー ヨーロッパ種が専念する「専門家」 大衆文化は長い 「高度消費社会」 トが考えるよりも広い 「現実」 期間の間 が生み出される状 知的 (リオター 知的 しば直 エリ 0) 社会 IJ 理 ル

ここにヨー

ロッ

パ

流の仮説演繹法を批判する糸口があることは

対する関心もいくらか含まれてはい

るが、その焦点は

般大

0

である。

口

か? という疑問である。 るのは、同時代の無数の一般人からなる「現実」だったのではないであるとしても、数少ない彼らに社会科学上の「仮説」を想起させうまでもない。肝心の「仮説」を生み出すのは少数の知的エリート

らば、 ないわけである。 また、 場する有名な事例を使えば、ジェンナーが種痘法を開発したのは臨 ものでしかない。 る。 肝心の仮説も生まれなかったであろうということは容易に想像でき なのである。 主義は答えられないのである。 ら天然痘の治療法を提案しなかったのか? 床経験からの帰納法によるのであって、「種痘法」というアプリ それならば、 れくらいの批判で揺らぐようなものではない。 複雑な対象を説明する「仮説」を検証 んだ対象を観察する中 いう仮説を思いついたジェンナーという個人の存在が決定的に重要 に与えられた仮説に適合する物質を探していたわけではない 組んできた無数の医師はなぜ種痘法を考え付かなかっ う議論がある。 もちろん、科学哲学の領域に鉄壁を張り巡らした仮説演繹法 仮説演繹法も仮説構成の段階での経験帰納法の介在は無視でき それ以前から牛を飼ってきた牛飼いはなぜ自分たちの経 議論は反転するからである。 しかし、ジェンナー なぜ一般の人々は「仮説」を構成しないのかと問うな ところが、それならば有史以来天然痘の治療に取 これに対して、 ジェンナーの事例はあくまで単 「仮説」を構成しなければならな やはり、 が臨床の現場にいなかったならば、 社会科学ははるかに複雑に入り組 例えば、 (反証) 研究のある段階で種痘法と という疑問に経験帰納 科学論の議論で毎度登 可能な形で提示する 反論は簡単である。 一の命題をめぐる た 0) の か? だと オリ は 験

> 確信するわけである。 仕事は、単なる経験を越えるものであると、仮説演繹法の信奉者は

ていく。 戻ると、 下に仕事を続けてきたということができる。 リカで大きな成果をあげてきた経験 する抗しがたい魅力に引き寄せられながら、 二十世紀末以降の社会学者は、 両者の認識論上の相違点は研究方法の相違に直接つなが 大陸ヨ (観察) 门 口 英語圏、 再度マー 帰納法の圧倒的な影響 ツ パ の仮 とりわけアメ 説演 トンの議論に 繹法 発

諸段階、 雑な相子 カ種は 的構造について考える。 ば は たは態度) インフォメーションの寄せ集めに重点を置き、 を研究するが、 は観念という意味が含まれていない。 フォメーションには、 知識とは事実または観念の組織体を意味するのに反して、 識に注目し、アメリカ種はインフォメーションに注目して きり示している。 両種の方針は、さらに細部にわたって微妙な対比関係をはっ 因子分析の技術によっ 教理の体系に重点を置く。 互関係にある教理の体系を、 般大衆のもつばらばらの断片的なインフォメー 分析することが重要となる。 および範疇化 を発見することが重要となる。 ヨーロッパ種は少数者に利用される知識の全体 すなわち、 かような体系的な関連をもった事実また (例えば、 アメリカの方は、ばらばらの断片的 て、 認識の面では、 ヨーロッパの方では、 経験的に生ずる一 形態学的または分析的 概念的統 したがって、 アメリカの方では、 前者は論理的に存立 ヨーロッパ種は知 3 群の観念 抽象と具体の 通常アメリ \Box 極めて複 ッパ ショ 、の方 イン 例え

する関係を強調し、後者は経験的に生ずる関係を強調する。」(四

) 二 頁

ない。

立い。

立い。

立い。

立い。

立い。

立だし、長年の疑問氷解はこれだけにとどまるわけでは
事に説明してくれた例を今まで知らなかった。まさに疑問氷解の瞬
事に説明してくれた例を今まで知らなかった。まさに疑問氷解の関
事に説明してくれた例を今まで知らなかった。まさに疑問氷解の関
事に説明してくれた例を今まで知らないった説明は、おそら

つづく)

注

- 男経由だったと考えた方が公平であるとすらいえるだろう。1.むしろ、日本でマンハイムの知識社会学が受容されるのは、丸山真
- 2 最近の著作では、伊勢田哲治『疑似科学と科学の哲学』(名古屋大学 最近の著作では、伊勢田哲治『疑似科学と科学の哲学』(名古屋大学 1 最近の著作では、伊勢田哲治『疑似科学と科学の哲学』(名古屋大学
- は『百科全書』の宗教に関する項目の執筆者であり、またベッカーリフランスの神学者・哲学者アンドレ・モルレ(一七二七―一八一九)び革命についての回顧録』(一八二一))で書いているとのことである。3 マートンがつけた原注によると、この一文はアンドレ・モルレに宛

の『犯罪と刑罰』(一七六四)の仏訳者でもある。

- 筆者はこれまでマックス・ウェーバーからカール・マンハイムやノルベルト・エリアス、そしてニクラス・ルーマンにいたる主にドイツルベルト・エリアス、そしてニクラス・ルーマンにいたる主にドイツルベルト・エリアス、そしてニクラス・ルーマンにいたる主にドイツルベルト・エリアス、そしてニクラス・ルーマンにいたる主にドイツルズリカ社会学を研究する人々にとっては、ほとんどイロハに属するアメリカ社会学を研究する人々にとっては、ほとんどイロハに属するアメリカ社会学を研究する人々にとっては、ほとんどイロハに属する本文献だからである。
- 生物学由来の概念を用いた比喩は確かに、学問の発展を説明する上生物学由来の概念を用いた比喩は確かに、学問の発展を説明することである。それに沿って自分たちの学問の過程を理解しようとすることであて、それに沿って自分たちの学問の過程を理解しようとすることである。と物学由来の概念を用いた比喩は確かに、学問の発展を説明する上生物学由来の概念を用いた比喩は確かに、学問の発展を説明する上生物学由来の概念を用いた比喩は確かに、学問の発展を説明する上生物学由来の概念を用いた比喩は確かに、学問の発展を説明する上生物学由来の概念を用いた比喩は確かに、学問の発展を説明する上生物学由来の概念を用いた比喩は確かに、学問の発展を説明する上生物学由来の概念を用いた比喩は確かに、学問の発展を説明する上生物学由来の概念を用いた比喩は確かに、学問の発展を説明する上生物学由来の概念を用いた比喩は確かに、学問の発展を説明する上
- としてもごく少数派である。この意味でも、マートンの批判は強力なたく言えば、「社会調査など無意味だ」と明言する社会学者は存在したこういった学界の趨勢に対する敬意を表明するようになっている。平形成しつつあり、高度に思弁的な方法を標榜している社会学者ですら年の経験主義と数量化のますますの伸張は広汎な学界における常識をいうまでもなく、この種の明言を行う研究者はごく少数である。近

らである。 に抱いている無力感や後ろめたさに直接訴えかける力を持っているかのである。それは、思弁的な方法に専念する社会学者ですら内心密かのである。

ある。 のリチャード・ローティーであった。 リス以外の大陸ヨーロッパ人)は「語ることができないこと」につい ことも関係している。簡単に言えば、これまでのヨーロッパ人(イギ 義をめぐってヨーロッパ人が延々と考えてきた多種多様な「秘教」に 残るのは著者の文学的な魅力や、長年の名声や、地位による権威だけ の事態を指して「言語論的転回」と呼んだのは、 言語論や言語行為論、言語ゲーム論だけなのだというわけである。こ いであり、その種のおしゃべりを避けて科学的に検証可能な問題は、 て延々と無意味なおしゃべりをしてきたのではないのか? という問 の社会科学者を中心になぜこれほどまでに受け入れられたのかという ンティズムの倫理と資本主義の精神」の命題についてもいえることで ついてもいえることであるし、マックス・ウェーバーの「プロテスタ だということになってしまう。同じことはヘーゲル哲学やマルクス主 証可能な命題として構成されることをはじめから拒否している。 いた「仮説」以前の哲学的思弁に依存しており、 例えば、フランクフルト学派の魅力の大きな部分を占めている言説 「啓蒙の弁証法」「エロス社会」他 他方で、ウィトゲンシュタインの果たした「革命」が、英米系 | は、 確かに、当人の思いつ これまたアメリカ人 検証を行おうにも検

マンハイムと知識社会学」。 『社会理論と社会構造』第十二章「知識社会学」、第十三章「カール・

独断を指摘したところで、ほとんど意味がないのは事実である。それ大衆向け読み物を取り上げて、方法論上の過誤や宗教的偏見に基づく知的に低級であり、俗化された学知への批判めいた文言ばかりが先行知的に低級であり、俗化された学知への批判めいた文言ばかりが先行知的に低級であり、俗化された学知への批判めいた文言ばかりが先行知的に低級であり、俗化された学知への批判めいた文言ばかりが先行知的に低級であり、俗化された学知への批判めいた文言ばかりが先行知ができた。その場合に、どうしては、「日本人論」はあまりにも可能を指摘したところで、ほとんど意味がないのは事実である。それ、大衆向け読み物を取り、俗化されている。

見」を、社会学的に研究することであった。コミ研究の手法でこの種の「読み物」が主張したいと願ってきた「意こともできる。むしろ、私がやるべきだったのは、アメリカ種のマスは、いうならば鶏を割くのに牛刀を用いるような作業であったという

に挙げておくことにする。という種の手法をアメリカのマスの目の方法をよる。、私なりの模索によって、この種の手法をアメリカのマスはいろ考えてきた。ほかならぬマートンの概念である「自己達成予言」という概念と日本人論の構造を分析するという作業も行っている。またリースマンがアメリカの大衆社会について開発した「他人志向型」という概念と日本人論の構造を分析するという作業も行っている。まな手がかりに日本人論の構造を分析するという自負はある。現にいろコミ研究とは別個に私が編み出してきたという自負はある。現にいろコミ研究とは別個に私が編み出してきたという自負はある。現にいろコミ研究とは別個に私が編み出してきたという自負はある。現にいる。

出稿「日本人」を語る二つの方法:ルース・ベネディクトとジョン・ダ 出稿「日本人」を語る二つの方法:ルース・ベネディクトと日本人論の知識社会学――」、『北海学園大学 学園論集』第一二七号、二〇〇三年 出稿「ジャパノロジーと人種主義の語り方――日本人論の知識社会学:中間考察1――」、『北海学園大学 学園論集』第一一七号、二〇〇三年 出稿「遂行的矛盾と自己達成予言――日本人論の知識社会学:中間考察1――」、『北海学園大学 学園論集』第一一九号、二〇〇三年 出稿「必行的矛盾と自己達成予言――日本人論の知識社会学:中間考察1――」、『北海学園大学 学園論集』第一二一号、二〇〇四年 出稿「他人指向と自立の理想と現実――日本人論の知識社会学:中間考察 2―」、『北海学園大学 学園論集』第一二一号、二〇〇四年 3 ――」、『北海学園大学 学園論集』第一二一号、二〇〇四年 3 ――」、『北海学園大学 学園論集』第一二一号、二〇〇四年 3 ――」、『北海学園大学 学園論集』第一二一号、二〇〇四年 出稿「他人指向と自立の理想と現実――日本人論の知識社会学:中間考察 2 ――」、『北海学園大学 学園論集』第一二一号、二〇〇四年 出稿「他人指向と自立の理想と現実」の対象を表示。

拙稿「『日本』を知識社会学で論じるには 1」、『北海学園大学 学園論集』二三号、二〇〇五年

拙稿「にせ外国人の社会学 —— パオロ・マッツァリーノ著 『反社会学講座

(イースト・プレス二○○四年)──」、『北海学園大学

学園論集』

第

拙稿「山本七平と″にせ外国人〟の系譜学 ——『日本』を知識社会学で論じ善第一二七号、二〇〇六年

10

とポパーはいい切る。
とポパーはいい切る。
とポパーはいい切る。
にさてポパーの論理実証主義にたいする批判的挑戦は、検証可能性「さてポパーの論理実証主義にたいする批判的挑戦は、検証可能性「さてポパーの論理実証主義にたいする批判的挑戦は、検証可能性であるがなの余計ものであり、論理的矛盾に陥らざるをえない」の問題にとどまらない。検証問題は帰納論理を否定することでもあっており、検証を否定することは帰納論理を否定することでもあっており、検証を否定することは帰納論理を否定することでもあっており、検証を否定することにあるかの主張をたいなが、検証を表が定式化した観察帰納法は、科学の作業があた。古典的実証主義が定式化した観察帰納法は、科学の作業があた。古典的実証主義が定式化した観察帰納法は、科学の作業があた。古典的実証を表が、検証可能性「さてポパーはいい切る。

十五頁)
十五頁)
十五百)